

# 女子大学生における同性愛に対する態度と 多様な性の在り方への無知度がセクシュアル・ マイノリティとの接触度に与える影響

南谷藍里

(広島国際大学大学院心理科学研究科)

## 問題

「同性愛」という文化・概念は神話や文学でも登場するように古今東西で知られている。一方、より多様な性の在り方を表す「セクシュアル・マイノリティ」等の言葉は日本において近年、浸透し始めていると思われる。論文検索サービス CiNii において「同性愛」を検索すると 1951 年のものが最も古く、「セクシュアル・マイノリティ」や「LGBT」はそれぞれ 1999 年、2001 年が最も古いものであった。

「同性愛」に対する態度について和田 (2010) は、同性愛の知識が多い者ほど、また同性愛者との接触が多い者ほど、同性愛を拒否していないことを示している。社会で既に認知されているとも考えられる「同性愛」に対し、「セクシュアル・マイノリティ」などの概念は新しく、また多様な概念を包括しているため、多くの人が明確な態度を有しているとは言い切れない。ある対象について無知な場合は態度が形成せず、形成されていない者は形成されている者よりも態度と行動の間に一貫性が無いと考えられている (坂原, 1986)。では、社会で広く認知されている「同性愛」に対する個々人の態度と、近年注目され始めている多様な性についての知識を持たないことは、セクシュアル・マイノリティの人々への関わり方にどのような影響を与えるだろうか。本研究では、同性愛に対する態度と、多様な性の在り方への無知度が、セクシュアル・マイノリティとの接触行動に与える影響を検討する。特に同性愛に対する態度のうちネガティブイメージに注目した内容を報告する。

## 方法

**調査対象者:** 関西地区にある女子大学の学生 234 名が調査に参加し、188 名が分析対象となった (平均年齢 19.20)。調査期間は 2013 年 10 月上旬。

**質問紙内容:** (1) 同性愛に対する態度: 和田 (2008) による同性愛に対する態度尺度から 39 項目を抜粋し使用。(2) 多様な性の在り方への無知度: 性

の在り方を表現した単語 9 項目について認知しているかを回答するもの。(3) セクシュアル・マイノリティとの接触度: 日常生活で関わり得る場面 9 項目についてその接触頻度を回答するもの。(2)、(3) は独自に作成した。

## 結果と考察

同性愛に対する態度尺度について最尤法・プロマックス回転で因子分析を行った結果、「ネガティブイメージ度」(10 項目,  $\alpha=.87$ ), 「関係の拒絶」(7 項目,  $\alpha=.79$ ), 「容認・寛容」(5 項目,  $\alpha=.74$ ) の 3 因子が抽出された。ネガティブイメージ度と多様な性の在り方への無知度, 交互作用項を独立変数, セクシュアル・マイノリティとの接触度を従属変数とした階層的重回帰分析を行った結果, 交互作用効果がみられた ( $F(3,182)=18.88$ ,  $p<.05$ )。そこで単純主効果検定を行ったところ (図), ネガティブイメージ度の低い場合, 多様な性の在り方への無知度がセクシュアル・マイノリティとの接触度に影響を及ぼさなかったが, ネガティブイメージ度の高い場合, 多様な性の在り方への無知度が低いほどセクシュアル・マイノリティとの接触度が高かった ( $p<.001$ )。

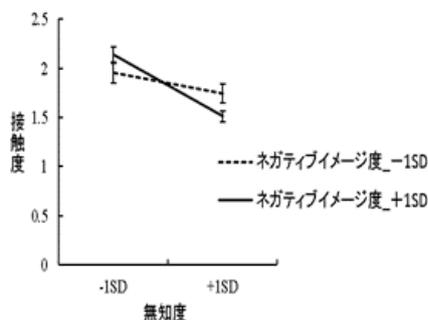


図 同性愛に対するネガティブイメージ度と性の多様性への無知度がセクシュアル・マイノリティとの接触度に与える影響

既に、同性愛に対する態度がネガティブイメージを含み形成されていたとしても、他にも多様な性が存在することを学び知る機会があれば、

そうした人々と関わりを持つという行動を増やし、引いては性の多様性を受け入れる社会へと繋げていくことが出来るのではないだろうか。これは、和田 (2010) の同性愛者と接触が多いほど同性愛を拒否していないという研究結果とも合わせて言えることと考えられる。